

TSUBOHORI

平成13年度(2001)

姫路市埋蔵文化財調査略報



2002

姫路市教育委員会

はじめに

姫路市は、播磨平野の中心に位置し、瀬戸内の温暖な気候と市川などの清流や書写山や広峰山などの水と緑に恵まれた自然豊かな環境にあります。歴史的にも、播磨国府や播磨国分寺といった公的施設が古くから置かれ、播磨の中心地として栄えてきました。その結果、市内には145件の国・県・市指定文化財をはじめとして、多くの文化財が残されています。また建造物などの地上にある文化財とは別に、地中には埋蔵文化財と呼ばれる、私たちの先祖の残した営みの跡が約1000ヶ所あります。近年の開発に伴って、こうした埋蔵文化財の発掘調査も増加の一途をたどり、新たな事実や新たな遺跡の発見が相次いでいます。

姫路市では、こうした調査成果のエッセンスを市民の皆様にも速やかにお伝えするために、平成8年度より埋蔵文化財調査略報を作成しております。本書が地中に残された文化財の存在を知っていただく一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、ご指導・ご協力賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長
高岡保宏

例言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成13(2001)年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、全て姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は中川が担当した。
4. 平成13年度発掘調査地点の位置図は国土地理院20万分の1図を、各調査地点の位置図は同2万5千分の1図を使用し、方位は全て上が北である。
5. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)
伊勢田雄次、今里幾次、小林哲也、柳内善一、穴吹興産株式会社、医療法人三栄会ツカザキ病院、株式会社神崎組、株式会社水内ゴム、学校法人淳心学院、国立姫路病院、姫路尚歯会、兵庫県姫路土木事務所、和久自治会
6. 遺物の整理および図版の作成には、境野佐知子、佐藤朋子、田中章子、野村知子、北條悠代、藤戸翼、圓尾かさね、水口千里、山田郁子、山本雅子、吉野弘子の補助を得た。
7. 表紙は、和久遺跡の調査地を南から写したもので、裏表紙は同遺跡出土の遺物である。

発掘調査の動向

平成13年度は、28件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。『TSUBOHORI』発刊以来、最多の調査件数である。調査した遺跡の時期も弥生時代から近世にかけてと幅広く、内容も様々である。

和久遺跡と船場川東区整遺跡は、弥生～古墳時代にかけての比較的規模の大きな集落で、遺構や遺物などから遺跡の実態がうかがえ、姫路平野における当該期の歴史を語るうえで重要な成果が得られた。英賀保駅周辺遺跡では、前年度に発見された第3地点の調査が行われ、弥生時代と中世の遺構が確認されている。姫路駅周辺第3地点遺跡においては、古墳時代の住居跡や市之郷廃寺と同時期の遺構が見つかり、豆腐町遺跡においては、近世に飾磨街道沿いに形成された町家遺構などが確認された。遺跡の試掘調査は区画整理事業に伴って行われ、新たな遺跡の発見や遺跡の範囲が広がることなどが確認されている。

姫路城跡では、内曲輪において小規模ながら防災工事やトイレ改修に伴って調査が行われた。中曲輪に所在するA地区と国立病院、淳心学院において、絵図に描かれている江戸時代の街路跡が見つかり、城下町街路の基本構造を知るうえで貴重なデータを得ることができた。外曲輪の城下町跡にも初めて本格的な調査のメスが入られ、市街地にも良好に遺跡が残っていることが判明した。

発掘調査成果の現地説明会は、和久遺跡において平成13年5月27日に実施し、1000人を超す見学者があった。



平成13年度 発掘調査地の位置図

番号	遺跡名	調査回数	調査地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
1	和久遺跡	1次	姫路市網干区和久	2,640㎡	2000.12.20～2001.05.31	民間開発	小柴
2	和久遺跡	2次	姫路市網干区和久	76㎡	2001.04.26～2001.04.27	民間開発	大谷・多田
3	船場川東区整遺跡 第6地点	16次	姫路市飯田	1,057㎡	2002.01.07～2002.02.28	民間開発	小柴
4	英賀保駅周辺遺跡 第3地点	1次	姫路市町坪	1,645㎡	2001.12.25～2002.03.15	区画整理	大谷
5	姫路駅周辺第3地点遺跡		姫路市市之郷	190㎡	2001.08.07～2001.10.12	民間開発	小柴
6	姫路駅周辺第3地点遺跡		姫路市市之郷	298㎡	2001.08.09～2001.10.17	福祉施設建設	小柴
7	向山遺跡	2次	姫路市太市	125㎡	2001.10.18～2001.10.26	道路補修	小柴
8	山吹遺跡	1次	姫路市山吹	189㎡	2001.11.06～2002.03.02	側溝工事	多田
9	豆腐町遺跡	1次	姫路市南畝町	925㎡	2002.01.15～2002.03.29	区画整理	秋枝
10	(仮称)西延末散布地	1次	姫路市西延末	134㎡	2001.05.07～2001.06.05	民間開発	多田
11	阿保百穴	1次	姫路市四郷町東阿保	183㎡	2001.09.25～2001.10.05	下水道工事	多田
12	阿保地区試掘調査	3次	姫路市阿保	348㎡	2002.02.05～2002.03.15	区画整理	多田
13	英賀保駅周辺試掘調査	2次	姫路市飾磨区山崎・付城・町坪	343㎡	2002.02.04～2002.03.22	区画整理	大谷
14	西蒲田地区試掘調査		姫路市西蒲田	80㎡	2002.03.09～2002.03.29	区画整理	中川
特別史跡 姫路城跡							
15	A地区 家老屋敷跡公園整備	199次	姫路市本町68	307㎡	2001.06.19～2002.03.15	便益施設建設	森
16	A地区 家老屋敷跡公園整備	209次	姫路市本町68	168㎡	2002.01.29～2002.03.15	便益施設建設	森
17	A地区 城南線整備	197次	姫路市本町68	281㎡	2001.06.19～2001.11.16	道路建設	森
18	東部中濠線整備	208次	姫路市本町68他	388㎡	2001.12.27～2002.03.28	道路整備	森
19	内曲輪 市立動物園トイレ改修	202次	姫路市本町68	26㎡	2001.08.08～2001.08.10	トイレ改修	森
20	C地区 店舗建替え	203次	姫路市本町68	28㎡	2001.08.28～2001.08.30	店舗建替え	森
21	国立姫路病院更新整備	198次	姫路市本町68	346㎡	2001.06.19～2001.11.25	病院更新整備	中川
22	淳心学院整備	206次	姫路市本町68	361㎡	2001.11.27～2002.03.04	学院整備	中川
23	内曲輪 姫路城防災施設整備	204次	姫路市本町68	99㎡	2001.09.18～2001.11.12	防災工事	中川
24	砥堀・本町線共同溝整備	207次	姫路市総社本町	242㎡	2001.12.04～2002.03.11	共同溝整備	山本
25	本町遺跡・姫路城跡	196次	姫路市総社本町	35㎡	2001.06.11～2001.06.13	店舗建替え	森・中川
26	本町遺跡・姫路城跡	201次	姫路市総社本町	39㎡	2001.06.28～2001.06.29	店舗建替え	森
27	姫路城城下町跡	205次	姫路市本町	210㎡	2001.11.27～2001.12.27	民間開発	中川
28	姫路城城下町跡	200次	姫路市坂田町・大黒寺丁町	630㎡	2001.06.21～2001.10.18	共同溝整備	多田

平成13年度 調査一覧

発掘調査の体制

教育委員会事務局

教育長 高岡保宏
教育次長 大前信也

文化部

部長 山田吉則

文化課

課長 牛尾誠

調査担当

係長 山本博利

秋枝芳彦

技術主任 大谷輝彦

多田暢久

森恒裕

技師 小柴治子

中川猛

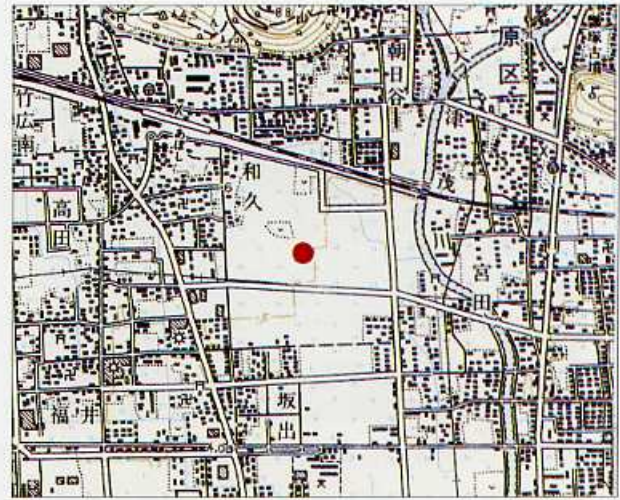


和久遺跡現地説明会

1. 和久遺跡

(第1次)

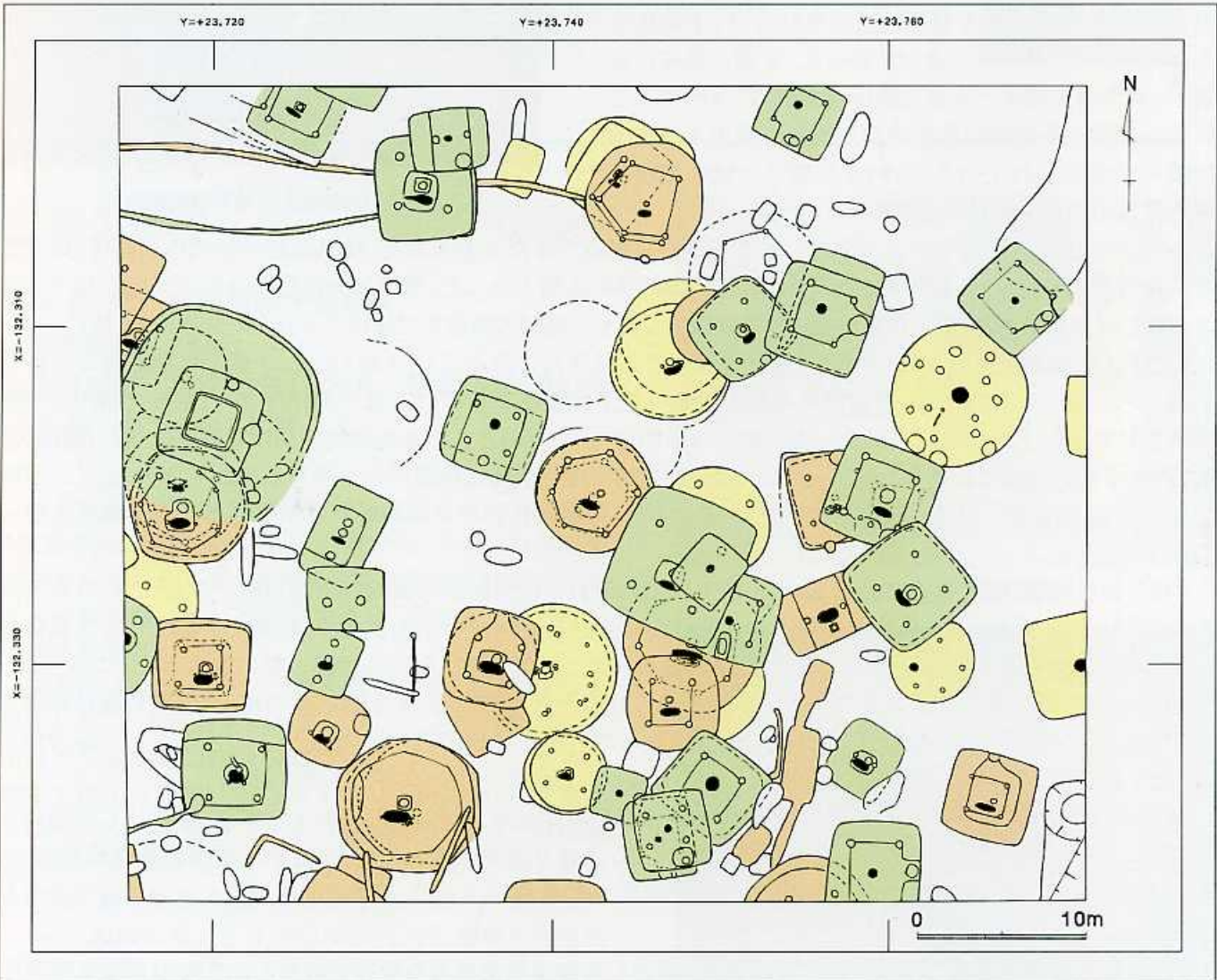
- 1.所在地 姫路市網干区和久
- 2.調査面積 2,640㎡
- 3.調査期間 平成12年12月20日～平成13年3月31日
平成13年4月20日～平成13年5月31日
- 4.担当者 小柴



調査地の位置図(「網干」)

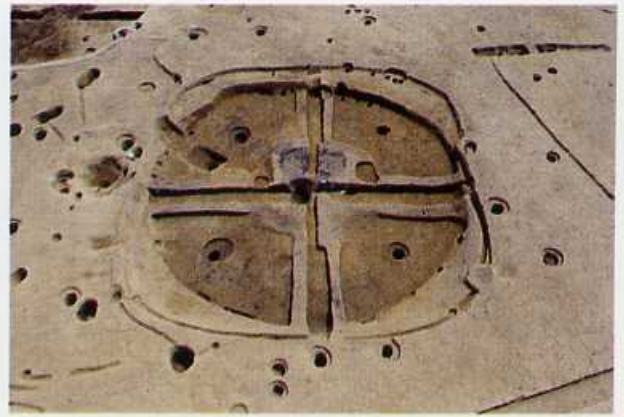
和久遺跡は、表採された土器から弥生時代の遺跡とされていたが、範囲や性格等の詳細はわかっていなかった。今回の調査個所も従来の遺跡想定範囲より南に位置している。ところが工事中に土器が出土し、確認調査を実施した結果、多数の遺構が検出され、遺跡が予想より南に広がっていたことが判明した。

このような経緯で、和久遺跡で初めての全面発掘調査は実施されたが、その範囲は遺跡全体から見るとほんの一部にすぎない。にもかかわらず、この遺跡が播磨の弥生社会を考えるうえで多くの情報を有する重要な遺跡であることが明らかとなった。以下に、その理由と遺跡の詳細を述べる。



平面略図(s=1:400) □ 弥生時代後期前半 □ 弥生時代後期後半 □ 古墳時代初頭(庄内併行期)

見つかったのは弥生時代中期の土坑、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡、土坑、溝、ピット、中世の掘立柱建物跡、溝等である。中でも、最も重要な成果は、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡の変遷をたどることができた点である。和久遺跡の竪穴住居跡は円形・多角形・方形・長方形のものがあり、規模は4～6mが標準だが、8mを越す例もある等多様である。全部で100棟余りを確認したが、これは約200年間のうちに何度も建て替えられたため、とても複雑に重なり合っていた。また同じ場所での改築も、古い床に盛土をして新しい床を構築した例が多く、重なった住居跡の新旧を明らかにすることによって住居跡の変遷をたどることができた。その結果、平面形の多様性は時期による差異であり、和久遺跡では弥生時代後期前半頃、大型の円形住居が主流で若干の方形住居が存在していたが、中頃には円形住居が小型化し、同時に多角形住居が出現する。そしてこの頃から方形住居の割合が増加し、後期末以降は方形と長方形の住居のみになり、小型化する傾向がある、ということがわかった。変遷の様相自体は、従来の研究成果と大きな違いはないが、今回のように狭い範囲で長期間の住居跡が重複して検出された例は県内でも限られていて、これまで想定の域をでなかった変遷の過程を補足する資料といえる。



円形住居を方形住居に改築した例(北から)



「10土坑」※坂本城跡検出

2点目は、住居跡の残りが良く室内の構造を詳しく確認できたことである。和久遺跡の竪穴住居跡は、床面までの深さが30cmを越えるものがあり、中には70cmに達する例もあった。地上部分は削平されていたが地下の部分は保存状態が良く、壁構造の痕跡等通常では検出しにくい細部の構造まで確認できたケースもある。特に「10土坑」と呼ばれる土坑が大半の住居跡で確認されたことは注目される。「10土坑」とは、一般的に炉と考えられている室内施設の種類である。通常は炭や焼土の入った土坑単体であるのに対し、円形の深い土坑と楕円形の浅く炭が詰まった土坑がセットになった特徴的な形態を持つ。今のところ弥生時代中期に播磨で出現し、讃岐、吉備、丹波等周辺地域に伝播したと考えられていて、播磨では弥生時代後期に姿を消すとされてきた。ところが和久遺跡では古墳時代初頭の住居にも「10土坑」が存在し、播磨における消長の下限が延びることが事実となった。

3点目は、土器に関する点である。和久遺跡ではそれぞれの住居跡から大量に土器が出土した。このうち古墳時代初頭の住居跡からは、播磨では出土する遺跡に限られる庄内甕も出土する等、時期の決め手となる資料も多い。現在は整理途中であるが、それぞれの住居跡から出土した土器を竪穴住居跡の順に並べることによって、土器の編年を研究するうえで重要な手がかりが得られると考えられる。また讃岐産の甕、河内産の器台等周辺地域から運ばれた土器や、それを模倣して作られたものも多く、地域間交流が盛んであったことがわかったとともに、他地域と播磨の併行関係を考えるうえでも有効な資料の一つになると予想される。

最後の点は、和久遺跡の立地にある。遺跡が所在する掛保川流域は、国指定史跡の丁瓢塚古墳をはじめ前期古墳の存在が目立つ。しかし同時期の集落跡に関しては、あまり調査が進んでいない。和久遺跡の調査成果は、それら前期古墳造営の背景となった古墳時代直前の社会情勢を探るうえで、重要な基礎資料の一つになると考えられる。

以上、和久遺跡を重要とする理由を挙げたが、前述したように姿を現したのは遺跡のわずかな部分にすぎない。今後の調査例の増加によって、新たな事実が明らかとなることを期待したい。

竪穴住居跡から出土した

ガラス製勾玉

「わあッ!? ソーダ飴みたいやね〜っ!!(^o^)」

土の中から顔をだした勾玉は、半透明のきれいな空色でした。

見つかったのは竪穴住居跡の柱穴からです。古墳時代初め頃の、一辺が8mもある大型の方形住居でした。出土した土器も、器台等日用品以外のものが目立つことから、普通の村人の住まいではなかったようです。

この時期のガラス製品、特に勾玉は、九州北部と丹後地方での出土例が多く、九州では鋳型も出土しています。しかし、県内では大変珍しいものです。ガラス製品といっても当時は製造が難しく宝石と同じ価値がありました。その勾玉を柱穴に埋めていたのですから、この建物は、何か特別な施設だったのかもしれない。



勾玉が出土した竪穴住居跡



実測図 (s=1:1)

出土状況

2. 和久遺跡

(第2次)

- 1.所在地 姫路市網干区和久
- 2.調査面積 76㎡
- 3.調査期間 平成13年4月26日～平成13年4月27日
- 4.担当者 大谷、多田

弥生時代の竪穴住居跡が多数検出された和久遺跡第1次調査地の北側約150mに位置する。付近には条里型地割りがみられるが、調査地点は北東を流れる宮田川により地割りが乱れる箇所であり、遺跡の北端となる可能性がある。

調査は、幅1mのトレンチを南北に5本と東西に1本設定した。このうち東側の第1・5トレンチでは、ほぼ耕土直下で黄褐色の地山が確認でき、土坑やピット等の遺構も検出されている。第5トレンチ南端には、北東から南西方向の弥生時代後期の溝が見つかった。溝は幅約1.6m、深さ約1mのV字断面をしている。下層の粘質土より上層に弥生土器の壺等が多量に含まれていた。

一方、西側のトレンチでは河川などの堆積とみられる黄灰色シルト層が存在し、旧河道が存在したと考えられる。



調査地の位置図(「網干」)



第5トレンチ全景(南西から)

3. 船場川東区整遺跡 第6地点15区 (第16次)

- 1.所在地 姫路市飯田
- 2.調査面積 1,057㎡
- 3.調査期間 平成14年1月7日～平成14年2月28日
- 4.担当者 小柴

姫路平野を縦断する船場川流域には、数多くの遺跡が点在している。本遺跡は、その船場川下流の東部に位置する。

昭和62年度に実施された区画整理事業に伴う試掘調査によって6ヶ所の遺跡が確認され、これまでに15次の調査が実施されてきた。このうち、今回の調査地である第6地点は弥生時代中期～中世の遺跡であることが判明している。

調査箇所は第6地点でも南側の、遺構が集中する場所にあっていた。見つかったのは弥生時代後期～古墳時代と中世の遺構である。このうち弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡、溝、土坑、および船場川東区整遺跡では初めての円形周溝墓を確認した。円形周溝墓とは、円形の盛土の周りに溝を巡らせた墓である。一般的に大きさは4～22mと様々であるが、大きいものは弥生時代の首長墓と考えられている。今回確認されたのは隣接する2基の円形周溝墓の一部である。盛土は削平されていたため、確認できたのは周溝のみであった。復元径は、約18mと大きく、溝の幅は約2.5m、深さは北側の墓(SD08)が約20cm、南側(SD09)が約1.2mである。造られた時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。同じ時期の遺構は、円形周溝墓の西側を南北に走る溝(SD10)と柵(SD11-2)である。溝は幅約3m、深さ約1.5mと大型で、断面はV字状を呈していた。柵は掘方の幅が約1m、深さは60cmを越える布掘りで、径10cm程度の杭を並べたものであった。杭は直線的にはなく、ジグザグに並べられていた可能性がある。この他、弥生時代後期の竪穴住居跡は全部で7棟を確認したが、周溝墓と同時期の住居跡は南隅で検出されたSH12-2と考えられる。形は隅丸方形で、支柱穴は2本である。ベッド状遺構は全周し、燃焼施設は円形の土坑と楕円形の土坑がセットとなる「10土坑」であった。残りの住居跡はすべて方形でベッド状遺構を持ち、燃焼施設は「10土坑」である。このうちSH04-1と05には張り出しがついていた。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡4棟、溝4条等がある。このうち竪穴住居跡3棟と溝1条は、古墳時代初頭の遺構であった。住居跡は全て方形で支柱穴は2本である。ベッド状遺構は2方と全周するものがあるが、燃焼施設は全て円形の浅い土坑のみに変化していた。3棟のうちSH11からは、吉備型甕が出土した。古墳時代中頃に造られたのは、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、溝3条である。このうち掘立柱建物跡は2×3間2棟、2×2間1棟が並んで確認された。一辺4～5mで、主軸は全てN-20°-Wである。溝は南北方向に走るSD11-1と、コの字状のSD28と36を確認した。SD11-1は幅約2m深さ約30cmである。SD28は幅2m前後、深さ約20cmで一辺約1mである。SD36は一辺20m前後で、幅は3～5m、深さ20cm～40cmである。SD36からは馬の歯が出土した。いずれも時期は5世紀末から6世紀初頭と考えられる。古墳時代後期の遺構は3間四方の掘立柱建物跡1棟を確認した。規模は5.6×6.8mで、主軸はN-40°-Eである。時期は6世紀後半とみられる。



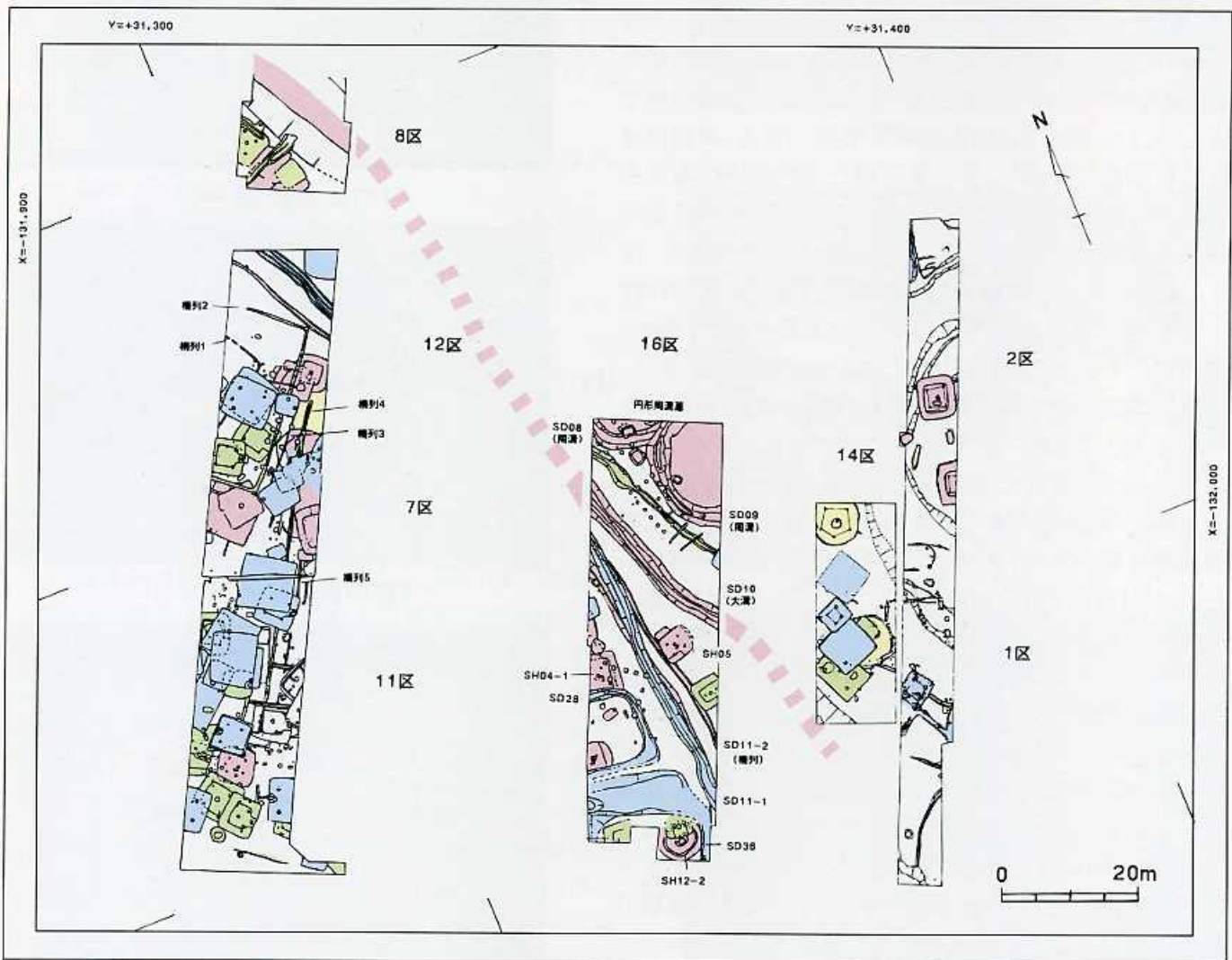
調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(北から)

中世の遺構は柱穴、溝、土坑、井戸等である。溝は現在の集落の地割りに沿うもので、屋敷境の溝と考えられる。土坑は、大型で覆い屋がかかるとみられる事例が3基確認された。中からは土師器や須恵器の小皿、青磁碗の破片に混じって鈹滓や焼土が出土したことから、鍛冶関係の作業場であった可能性もある。また、墓と考えられるものも2基確認した。この他井戸は、方形縦板組みで1度作り替えられていた。古いものは一辺90cmで、基底部分の木枠のみが残存していた。新しい方は一辺80cmである。井戸の底の方から須恵器碗等が出土した。

さて、各時代ごとに詳細を述べてきたが、今回の調査ではこれまでの調査成果とあわせて、弥生時代の第6地点の実態を把握するうえで重要な発見があった。それは円形周溝墓と大溝SD10、柵列、竪穴住居跡の位置関係である。それぞれの遺構の配置は、北東から南西に円形周溝墓、大溝、柵列の順で、円形周溝墓と同じ時期の竪穴住居跡は大溝の南西側でしか確認されなかった。この事実はこれまでの第6地点の成果とも一致している。また本調査区の西側で実施した第12次調査では、多数の竪穴住居跡とともにコの字型の柵列が確認された。このような柵列は集落の中心に巡らされることが多く、遺構の集中度とあわせて考えてもこの辺りがムラの中心部であった可能性が高い。以上の点から、SD10は墓域と居住域を区切る境界であると考えられる。つまりこのムラでは計画的な区割りに基づく土地利用を行っていたこと、それに伴う大規模な土木工事が可能であったことが判明した。と同時に、円形周溝墓が造られる以前の弥生時代中期の住居跡は大溝の北東で検出されていること、円形周溝墓や大溝は弥生時代末～古墳時代初頭のある時期に埋め立てられ、それ以降は居住域が北東側まで広がっていることから、この区割りが恒久的なものではなく、時代によって変化していることもわかった。



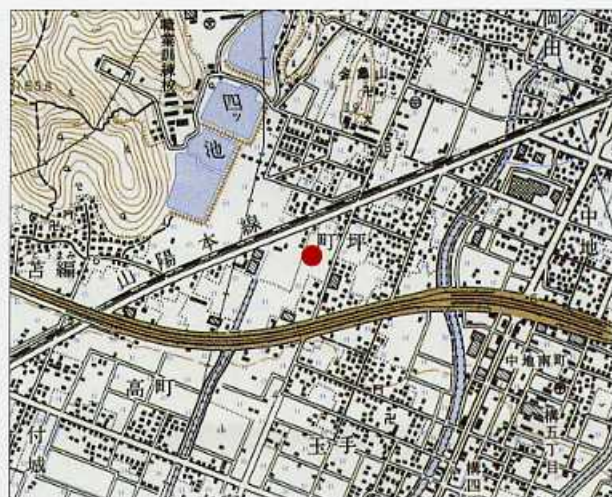
第6地点南部 平面略図 (s=1:1,000) ■ 弥生時代中期 ■ 弥生時代後期 ■ 古墳時代初頭 ■ 古墳時代

4. 英賀保駅周辺遺跡 第3地点 (第1次)

- 1.所在地 姫路市町坪
- 2.調査面積 1,645㎡
- 3.調査期間 平成13年12月25日～平成14年3月15日
- 4.担当者 大谷

平成12年度に行われた試掘調査によって、発見された3ヶ所の遺跡のうち、東北に位置する第3地点において区画道路工事に先立ち全面調査を行った。調査は、おおよそ東西方向となる計画幅員14mの都市計画道路棚田線の延長約100m(東から1・2区と呼称)とその西端から南に伸びる計画幅員12mの区画道路のうち、現水路等を除いた幅員約5m、延長約150m(北から3～7区と呼称)を対象とした。

1・2区では、大きく弥生時代と中世の遺構が見つかった。前者には、土坑(SK01・08)と不定形な溝状遺構(SX01・02)がある。SK01は、調査区東端に位置し、不整形の平面で、径約90cm、深さ約20cm、前期中葉の甕等が出土した。SK08は、調査区中程にあり、長円形平面で約1.5×1m、深さ約10cm、後期の甕等がある。溝状遺構は、1区中程に位置し、平行する幅1m程度の溝3本とその西側に続く不整形の落ち込みからなり、全体で東西約30mとなる。方位は、おおよそ東北東に方位を持ち、深さ約20cmを測る。詳細時期は不明。後者には、溝(SD01～06)、竪穴状遺構(SX04)、ピット多数がある。溝は、東西(01、04～06)および南北(02、03)の方位をとり、姫路平野で顕著に観察される飾磨郡条里型地割の方位(N-22°-E)にほぼ一致する。この中で最大となるSD06は、2区の大半を占め、東西約24m、幅約70cm、深さ約10cmを測る。平安時代末～鎌倉時代の東播系須恵器、土師器に加え韃の羽口、鉾滓などの鍛冶関連遺物も出土した。SX04はSD06の南に位置し、平面長方形で南北約4m、東西約2.5m、深さ約30cmを測る。中央部底面に薄く炭が堆積する。出土遺物には、東播系須恵器、土師器、貿易陶磁器(龍泉窯系青磁碗)等があり、SD06とほぼ同時期と考えられる。これらの周囲には、多数のピットが集中し、数棟の掘立柱建物になると考えられるが、切り合いが無く時的な前後関係は判然としない。3～6区では、南に向かって地盤が序々に下がる。中世のピット数基と江戸時代の土坑8基を検出したが、全体に遺構の密度は低い。7区は、微高地を外れ水田としての利用が想定される。



調査地の位置図(「姫路南部」)



1・2区全景(東から)



2区中世の遺構(西から)



1区SX01・02(北から)

5. 姫路駅周辺第3地点遺跡 (店舗建設に伴う)

- 1.所在地 姫路市市之郷
- 2.調査面積 190㎡
- 3.調査期間 平成13年8月7日～平成13年10月12日
- 4.担当者 小柴

調査地は姫路駅の東部に位置する。以前から市之郷廃寺の想定範囲とされていたが、JRの高架事業と姫路駅周辺の再開発事業に伴う確認調査によって、弥生～古墳時代、中世の集落跡と重複することが判明した。これまでに姫路市および、兵庫県によって発掘調査が実施されている。

今回の調査区は、その大半が旧河道にあっていた。この河道は、弥生時代中期頃埋没した市川の支流と考えられ昨年度南隣で実施された調査でも確認されている。この周辺が安定したのは約700年後の奈良時代と考えられ、調査区の東側で南北方向の溝を確認した。その他、平安時代後期の土坑からは瓦片のほか、鉾津が出土した。この付近に鍛冶施設が存在していたと考えられる。これらの遺構は、市之郷廃寺に関連するものだろうか。



調査地の位置図(「姫路南部」)



奈良時代の溝(北から)

6. 姫路駅周辺第3地点遺跡 (すこやかセンター建設に伴う)

- 1.所在地 姫路市市之郷
- 2.調査面積 298㎡
- 3.調査期間 平成13年8月9日～平成13年10月17日
- 4.担当者 小柴

前年度に調査を実施した、すこやかセンターの敷地内で、全天候型スポーツ施設の建設に伴って実施された。調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡1棟、7世紀末頃の柱穴・溝、中世の溝・土坑などを確認した。竪穴住居跡は一辺約7mの方形である。住居の西壁と南壁付近の検出にとどまったが、西壁の中央部ではカマドが見つかった。地面を削りだして作られたカマドの壁の基底部が残存しており、周辺からは土師器の破片が大量に出土した。7世紀末頃の柱穴は、柱の並びから3～4棟の掘立柱建物跡の一部であると考えられる。また、東西方向に流れる平安時代の溝からは、瓦片が出土した。建物跡や溝は、奈良～平安時代この付近に存在した、市之郷廃寺に関連する遺構である可能性もある。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(東から)

7. 向山遺跡

(第2次)

- 1.所在地 姫路市太市
- 2.調査面積 125㎡
- 3.調査期間 平成13年10月18日～平成13年10月26日
- 4.担当者 小柴

向山遺跡は、大市駅家想定地とされている。駅家とは奈良時代に整備された、古代山陽道に付属する施設である。宿泊や馬の交換など、高速道路のサービスエリアのような機能を持っていたが、利用できるのは国の官吏や国賓に限られていた。付近では、龍野市の小犬丸遺跡(布勢駅家跡)が有名だが、大市駅家は、実態がわかっていない。

今回の調査は市道の補修工事に伴い、南北方向の道路の両脇に幅50cmの調査区を設定して実施した。延長は西側が102m、東側が126mである。調査の結果、調査範囲の大半では、工事による掘削が地山より上の盛土層までにとどまることがわかった。しかし南端10m前後の範囲では、遺構検出面である明灰色粘土層を確認し、東西両調査区の南端では東西方向の溝を検出した。幅約1.5m、深さ25cmで、奈良時代の土師器甕が出土した。



調査地の位置図(「龍野」)



溝の検出状況(東から)

8. 山吹遺跡

(第1次)

- 1.所在地 姫路市山吹
- 2.調査面積 189㎡
- 3.調査期間 平成13年11月6日～平成14年3月2日
- 4.担当者 多田

高岡中学校周辺は『播磨国風土記』の「巨智里」に比定され、西側には式内社の高岳神社が所在する。縄文～古墳時代にかけての辻井遺跡にも近い。

今回は中学校南側市道の側溝設置に先立ち、幅1.3m、長さ146mの調査区を設定した。

道路盛土を取り除くと旧耕土が確認され、その下には約20cmの厚さで須恵器などの破片を含んだ黄褐色ないしオリーブ褐色の層がある。地山は黒褐色の砂礫土で、一部は黄褐色の粘質土となる。

地山面からは、暗褐色土で埋まったピットや土坑が40基近く検出されている。正確な時期は不明であるが、須恵器の細片などが出土している。明確な建物などは見つからなかったものの古代から中世にかけての遺跡とみられる。



調査地の位置図(「姫路北部」)



2区全景(南東から)

9. 豆腐町遺跡

- 1.所在地 姫路市南畝町
- 2.調査面積 925㎡
- 3.調査期間 平成14年1月15日～平成14年3月29日
- 4.担当者 秋枝

豆腐町遺跡は鉄道高架化事業に伴い兵庫県教育委員会が計4次に及ぶ発掘調査を実施した。その結果、第1面(平安時代後半)、第2面(奈良時代)、第3面(弥生時代中期)の計3面の遺構面が遺存していることが分かった。

この度、土地区画整理事業に伴い道路部分の発掘調査を姫路市教育委員会が実施した。調査場所は落窪寺踏切の南側、飾磨街道沿いである。

発掘調査で前記の3面の遺構面を確認した。また、現地表から約45cm下で江戸時代の遺構面を認め、石組み井戸・溝・土坑・掘立柱柱穴などの遺構を確認した。これらの遺構は飾磨門から飾磨港に通じる飾磨街道沿いに形成された町家の遺構で、ゴミ穴から町家の形成時期を考察するうえで貴重な江戸時代初頭の遺物も一括出土した。



調査地の位置図(「姫路南部」)



土坑17出土遺物(江戸時代初頭)

10. (仮称)西延末散布地 (第1次)

- 1.所在地 姫路市西延末
- 2.調査面積 134㎡
- 3.調査期間 平成13年5月7日～平成13年6月5日
- 4.担当者 多田

手柄山周辺には、橋詰遺跡や小山遺跡など弥生時代を中心とする集落跡が点在した。平成11年(1999)には、北側山麓の(仮称)西延末散布地で兵庫県教育委員会により、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。

調査は、JR山陽本線北側の駐車場予定地の擁壁部分について実施した。耕土直下には、中世以降の水田面と見られる厚さ約15cmの黄褐色層がある。その下は、厚さ約25cmの褐灰色ないし黒褐色の粘質土層を経て黒褐色の砂・シルト混じりの粘質土にいたる。遺構や遺物は発見されなかった。

下層の砂・シルト混じりの粘質土は、水尾川かその支流の旧河道埋没土と推定される。西側に近接する兵庫県の調査成果とあわせると、背後に山を控え、川に面した弥生時代集落の景観が想定される。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査状況(北西から)

11. 阿保百穴

(第1次)

- 1.所在地 姫路市四郷町東阿保字西山新畑
- 2.調査面積 183㎡
- 3.調査期間 平成13年9月25日～平成13年10月5日
- 4.担当者 多田

市川東岸の仁寿山から小富士山の山麓付近には、見野長塚古墳や見野群集墳など、中・後期の古墳が分布する。北側の谷にも横穴式石室を有する古墳が多数存在し、「阿保の百穴」と呼ばれていた。市営東阿保住宅の開発などにより、その多くは失われたが、現在も数基の古墳が確認できる。

今回、下水道工事に先立ち、豊川稲荷神社から東側へ続く道路内に、幅1.2mの調査区を153m分設定した。

道路下は、黄灰色の礫混じり中砂土の盛土が約10～30cmあり、黄色土の地山にいたる。道路は東側の谷中央へ傾斜しており、道路直下で地山が検出される個所もある。盛土は道路造成に伴うものと推定され、遺構・遺物ともに確認できない。

調査地点では、住宅造成時に大幅な掘削が行われ、遺構は失われたとみられる。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査地の土層状況

12. 阿保地区試掘調査

(第3次)

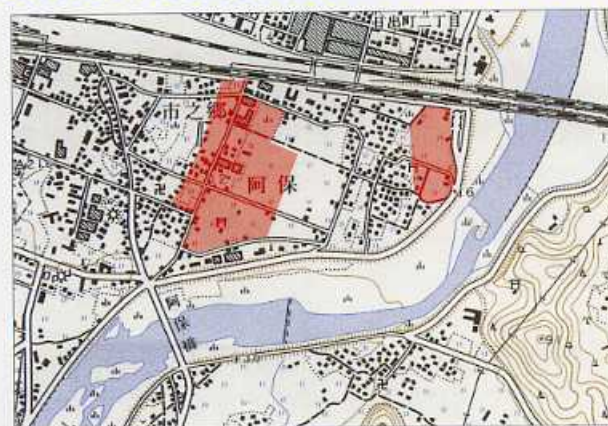
阿保地区土地区画整理事業地

- 1.所在地 姫路市阿保
- 2.調査面積 348㎡
- 3.調査期間 平成14年2月5日～平成14年3月15日
- 4.担当者 多田

市川西岸に位置する阿保の歴史は古く、『播磨国風土記』の「英保里」に比定される。平成11年度からは阿保土地区画整理事業に先立ち、試掘調査を実施してきた。今回で3年目となり、阿保乙地内の集落と市川との間の東部と、阿保橋から大日線にかけての西部を調査した。試掘坪は東部に30ヶ所、西部に57ヶ所の計87ヶ所を設定している。

東部では糸切底の須恵器碗を含む土坑やピットが検出され、中世初頭には市川近くに集落などが存在したと見られる。

西部の北側では、緑釉碗や布目瓦を含む多くの須恵器・土師器が出土しており、市之郷廃寺に関連する遺跡が存在したと考えられる。また、阿保神社周辺でも時期は不明ながらピットを検出しており、第1地点遺跡が東側へ広がっていたことが明らかになった。



調査地の位置図(「姫路南部」)



第65坪 須恵器出土状況(南東から)

13. 英賀保駅周辺試掘調査 (第2次)

英賀保駅周辺土地区画整理事業地

- 1.所在地 姫路市飾磨区山崎・付城、苫編、町坪
- 2.調査面積 343㎡
- 3.調査期間 平成14年2月4日～平成14年3月22日
- 4.担当者 大谷

事業面積約69haにおよぶ区画整理に伴う試掘調査は、平成12年度から3ヵ年計画で始まった。初年度には3ヶ所の遺跡を発見し、英賀保駅周辺遺跡第1～3地点と命名した。2年目にあたる今回の調査は、事業地西部の飾磨区山崎・付城地区、中部の苫編、東部の町坪と大きく3地区を対象とした。西部では、西半部が旧夢前川による自然堤防上となるが、遺構は見つからなかった。ここから東半部に向かって後背湿地となっていくが、その中間でピットを発見し、第1地点がさらに西へ延びることを確認した。中部では、黒褐色礫混じりシルトの安定したベースが全域に広がり、各所で中世の溝・ピット等を発見した。新たな遺跡として、第4地点と命名した。東部では、中世の遺構を発見し、第3地点が北へさらに延びることを確かめた。



調査地の位置図(「姫路南部」)



第76坪(第4地点)南から

14. 西蒲田地区試掘調査

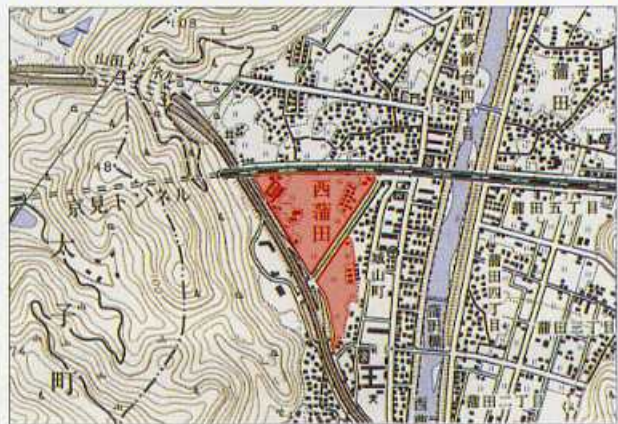
西蒲田地区土地区画整理事業地

- 1.所在地 姫路市西蒲田
- 2.調査面積 80㎡
- 3.調査期間 平成14年3月9日～平成14年3月29日
- 4.担当者 中川

調査地は夢前川と京見山に挟まれ、平野部は比較的狭い。付近には蒲田城跡や下野古墳群などがある。地表面には旧河道の痕跡が残っているが、現況では所々に微高地状の高まりが認められるため、区画整理事業に先立って遺跡の試掘調査を実施した。

調査は2×2mの試掘坪によって行った。基本的な層序は耕土、床土、灰色の砂層を経て砂礫層に至る。

調査地の地形は南北に走る道路をはさんで、西側が高く、東側がやや低い。東側の試掘坪においては、地表から概ね約50cmで砂礫層が確認された。西側では耕作土直下に砂礫層が確認される場所もあるなど、微高地状の高まりは単に盛土によるものであることが判明した。遺構、遺物とも確認されず、遺跡は存在していない可能性が高い。



調査地の位置図(「姫路南部」)



第15坪全景(南から)

15. 特別史跡姫路城跡 (第199次)

A地区 家老屋敷跡公園整備(受益施設D棟予定地)

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 307㎡
- 3.調査期間 平成13年6月19日～平成14年3月15日
- 4.担当者 森

江戸時代の城下町絵図と対照すると、調査地は中ノ門から桜門に至る南北街路東側の武家屋敷地に含まれる。

調査区内では江戸時代のものを中心に各期の遺構が重複していた。検出した遺構は土坑を主体とし、他に井戸・柵・石組み土坑等がある。土坑は調査区のほぼ全域で検出しているが、とくに南部では幕末～明治期のものとみられる大型廃棄坑が多く認められ、内部から東山焼を含む陶磁器類や瓦が大量に出土している。また、これらの土坑に切られるかたちで17世紀代の土坑も確認した。柵は最大長30cm前後の河原石を55～65cm間隔で南北一列に並べたもので、江戸時代の井戸に切られている。石組み土坑は東西140cm×南北80cm・最大高45cmの河原石組みを有し、内部から朝鮮王朝製の白磁輪花皿が1点出土した。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(南から)

16. 特別史跡姫路城跡 (第209次)

A地区 家老屋敷跡公園整備(受益施設B棟予定地)

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 168㎡
- 3.調査期間 平成14年1月29日～平成14年3月15日
- 4.担当者 森

調査地は桜門前の武家屋敷地北端付近に該当する。城下町絵図によれば、当該地は17世紀中期に一般の武家屋敷から厩に変更されている。また、これまでの調査成果から厩の建物は敷地の北縁に置かれており、南部は大部分が空閑地であった可能性が高い。

今回の調査で検出した遺構には、土坑・井戸・石組み遺構等がある。検出面は須恵器や布目瓦の細片を包含する黄灰色土層上面で、この層の上には唐津焼溝縁皿や瀬戸美濃焼織部向付といった17世紀前半期の遺物を包含する整地土がみられた。出土遺物が少なく、時期の特定が困難な遺構もあるが、明確に17世紀後半以降に下るものは認められない。整地土から出土した遺物の時期を勘案すると、これらは基本的には17世紀前半期を下限とする遺構群とみてよいであろう。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(西から)

17. 特別史跡姫路城跡 (第197次)

A地区 都市計画道路城南線整備

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 281㎡
- 3.調査期間 平成13年6月19日～平成13年11月16日
- 4.担当者 森

調査個所は平成12年度の調査地(第188次調査)の東隣部に位置し、中ノ門から桜門に至る南北街路の北端部に比定される。

街路遺構の保存状態は比較的良好で、第188次調査の成果とあわせてその構造を把握することができた。東西の側溝部を含めた街路幅は約17mを測る。路面は礫混じりの砂質土で固めており、数回の改修が想定される。なお、街路の西側には明確な石組み側溝が付属していたが、今回検出した東側では西面(街路側)の石組みが不明瞭である。水流の量等に応じて排水施設の構造に差をつけていたことも考慮されよう。

第188次調査で一部確認した石敷きの暗渠状遺構は、街路の下を横断し、東側の屋敷地北の石組み溝に接続していることが判明した。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(東から)

18. 特別史跡姫路城跡 (第208次)

都市計画道路東部中濠線整備

- 1.所在地 姫路市本町68番地 他
- 2.調査面積 388㎡
- 3.調査期間 平成13年12月27日～平成14年3月28日
- 4.担当者 森

城下町絵図と現況とを対比すると、調査地の大部分は久長門から喜斎門に至る東西街路に面する武家屋敷地に含まれる。また、調査地東部の一部は久長門内および外曲輪部分に相当している。

調査地内では埋設管路の攪乱が著しく、遺構は極めて限られた範囲にしか残っていない状況であった。検出した遺構は土坑・溝・ピット等で、武家屋敷建物の遺構や久長門の礎石は確認していない。調査地中央付近には南北街路が想定されるが、側溝の一部とみられる石組みを検出したにとどまった。なお、土層の観察により、久長門付近では黄褐色土地山の検出レベルが高く、微高地になっていたことが判明した。一方、調査地西部は江戸時代以前には水田など、湿地状の様相を呈していたとみられる。



調査地の位置図(「姫路北部」)



南北街路想定部石組み(南西から)

19. 特別史跡姫路城跡 (第202次)

内曲輪 市立動物園トイレ改修

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 26㎡
- 3.調査期間 平成13年8月8日～平成13年8月10日
- 4.担当者 森

調査地は姫路城内曲輪の南東部、三の丸向屋敷の一面に位置する。第2次本多氏時代の絵図とされる「姫路城内曲輪絵図」(中根忠之氏所蔵)によると、調査地付近は屋敷建物の東に広がる池に該当する可能性が高い。

調査の結果、調査区中央付近ではほぼ南北方向に並ぶ4点の石材を検出した。流紋岩系の岩石を立体的に配置しており、何らかの修景的な意図をうかがわせる。また、石材より西側には大きな落込みがあり、内部から17世紀後半～18世紀の肥前陶磁器片が少量出土した。

調査区の制限等から遺構の全容は明らかにできなかったが、石材の特徴や出土遺物の時期を考えあわせると、今回検出した遺構が三の丸向屋敷の庭園に関わるものである可能性も否定できない。



調査地の位置図(「姫路北部」)



石材検出状況(西から)

20. 特別史跡姫路城跡 (第203次)

C地区 店舗建替え

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 28㎡
- 3.調査期間 平成13年8月28日～平成13年8月30日
- 4.担当者 森

本町商店街に所在する店舗の建替え工事に先行して、建物基礎設置予定個所の発掘調査を実施した。当該地は姫路城南部中曲輪の武家屋敷地に比定される。

調査区内では、表土および明治時代以降の盛土の下に灰黄褐色土層(厚さ20～40cm)が見られ、少量の土器片を包含する黄灰色土層(厚さ10～15cm)を経て、現地表面から80～100cm下で黄褐色土地山に達する。検出した遺構は、17世紀後半～18世紀の溝1条のほか、土坑・ピット等がある。建物礎石や土塀基礎、井戸といった武家屋敷の施設に関する遺構は確認できなかった。隣接する特別史跡姫路城跡D地区(お城本町地区)の調査成果を考慮すると、当該地では19世紀後半期の土地改変により、江戸時代の生活面が失われたことも想定される。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(南西から)

21. 特別史跡姫路城跡 (第198次)

国立姫路病院更新整備9次

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 346㎡
- 3.調査期間 平成13年6月19日～平成13年11月25日
- 4.担当者 中川

調査地点は絵図によれば、喜斎門から久長門を東西に結ぶ街路と「上岐阜町通」との交差点に該当する。調査区のほぼ中央で「上岐阜町通」が確認された。街路面の幅は約6m、東西に幅約50cmの側溝を持ち、屋敷側には幅約1mの土塀基礎が検出された。街路面には小礫の叩きが確認されるなど良好な保存状態であった。東西街路は街路の北側部分の側溝と土塀基礎とが確認された。街路西側の屋敷内からは第8次調査で確認されていた池の続きが検出された。池の下部からは、18世紀前半頃に埋まったと考えられる井戸が見つかり、池の構築はこの時期を上限とすることが判明した。

また下層からは奈良時代の溝が検出されており、本町遺跡との関係がうかがえる。



調査地の位置図(「姫路北部」)



上岐阜町通(北西から)

22. 特別史跡姫路城跡 (第206次)

淳心学院整備事業

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 361㎡
- 3.調査期間 平成13年11月27日～平成14年3月4日
- 4.担当者 中川

淳心学院整備事業の事前調査として、遺構の保存状態を確認するために幅2mのトレンチ調査を実施した。

調査地は絵図によると、南北に走る2本の街路と5軒の屋敷のそれぞれ一部分に該当する。西側の街路遺構「下岐阜町通」は、街路の両側の側溝が確認され、東側の土塁際街路は街路側溝と土塀の基礎とが良好に残っていた。屋敷内からは石室や井戸といった、屋敷に伴う付属施設が確認された。調査区のほぼ中央で池の護岸状の石列が確認され、屋敷内の池と想定される。他に江戸時代後半のゴミ穴を多数検出したが、トレンチ調査であるため全容は不明である。また調査地は盛土直下に地山が検出され、微高地上に遺跡が立地していることがわかった。



調査地の位置図(「姫路北部」)



土塁際街路側溝(北から)

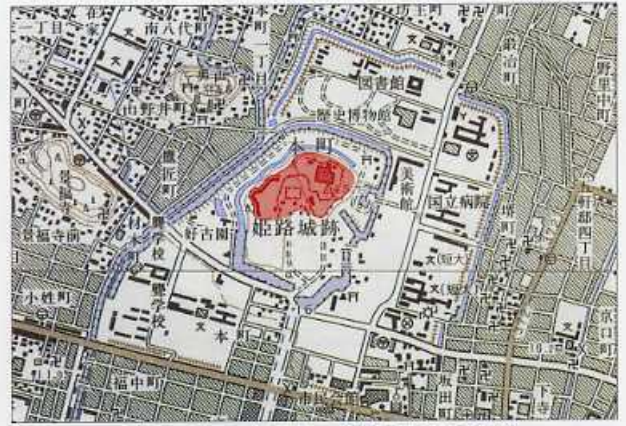
23. 特別史跡姫路城跡 (第204次)

内曲輪 姫路城防災施設整備

- 1.所在地 姫路市本町68番地
- 2.調査面積 99㎡
- 3.調査期間 平成13年9月18日～平成13年11月12日
- 4.担当者 中川

姫路城内の防災設備工事に先行して、工事予定個所の遺構の残存状態を確認するために調査を実施した。調査個所は主に西の丸と備前丸周辺に所在する。

備前丸と西の丸において礎石を検出した。絵図から、それぞれ櫓と倉庫のものである可能性が高い。上山里曲輪では瓦の廃棄土坑が見つかった。多数の軒瓦の他、鯨瓦や鬼瓦等が出土し、鯨瓦の背面には製作者と考えられる人物名が、鬼瓦には「文化十三年」の銘があった。類似資料から2つの瓦は同一人物作成の可能性があり、姫路城の修理に使用されたものと考えられる。井戸曲輪上部の通路では、盛土直下に栗石が検出され、この部分の曲輪が自然地形を利用したものではなく、人為的に造り出されたものであることが明らかとなった。



調査地の位置図(「姫路北側」)



西の丸礎石検出状況

24. 姫路城跡 (第207次)

砥堀・本町線共同溝整備

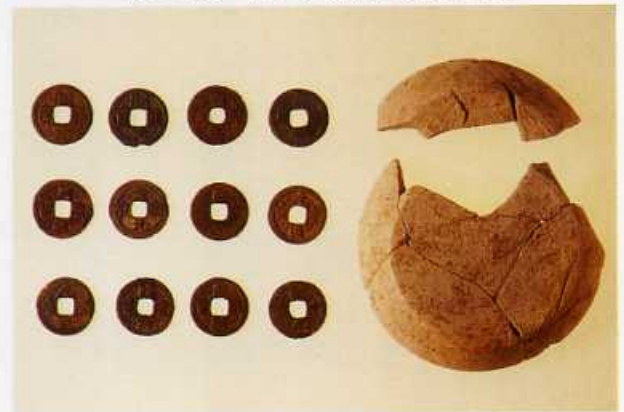
- 1.所在地 姫路市総社本町
- 2.調査面積 242㎡
- 3.調査期間 平成13年12月4日～平成14年3月11日
- 4.担当者 山本

調査は、兵庫県中播磨県民局の県道砥堀・本町線電線共同溝整備事業に伴い実施した。調査区は、市民会館前国道2号北歩道から姫路郵便局前までの県道東歩道を対象とし幅約1m、総延長236.5mに及ぶ。今回の調査区は、播磨国府関連遺跡として著名な本町遺跡の枢要部を南北に縦断するかたちとなった。なかでも、神戸新聞社姫路支局跡地(6区)から姫路郵便局前(15区)にかけて、国府関連の遺構(土坑・溝等、9～12世紀頃)、および関連遺物を包含する暗褐色土層の拡がり比較的濃密であった。

江戸時代の城下町関連遺構としては、総社門跡樹形西石垣の基礎地業と石垣に沿う溝、N T T東館西側で街路側溝石組みの一部、旧総社「血の池」跡西側で池の導・排水路と推定される石組み溝などが検出された。



調査地の位置図(「姫路南側」)



9区出土 銭貨・小皿

25. 本町遺跡・姫路城跡 (第196次)

店舗建て替え

- 1.所在地 姫路市総社本町195の2
- 2.調査面積 35㎡
- 3.調査期間 平成13年6月11日～平成13年6月13日
- 4.担当者 森・中川

調査地は播磨国府推定地である本町遺跡と姫路城中曲輪に所在する。店舗建替えに伴って調査を実施した。

調査区は基本的に40cm程の盛土直下に黄褐色の地山があり、遺構は全てこの面で見つかった。調査区の東半分にあたる2区と3区は攪乱を受けていたが、西側の1区と4区からは遺構が検出された。1区では布目瓦を含む、素掘りの溝と2基の江戸時代の土坑を検出した。この溝は東西に延び2区の壁面でも観察された。溝は調査区外に延びるため全容は不明であるが、幅は最大で2m、深さは60cmを測る。平安時代頃のものと考えられ、播磨国府と関連する、何らかの区画溝である可能性が考えられる。江戸時代の土坑からは、瓦片などが出土した。

4区においては江戸時代以前のピットが確認された。



調査地の位置図(「姫路南部」)



1区全景(南東から)

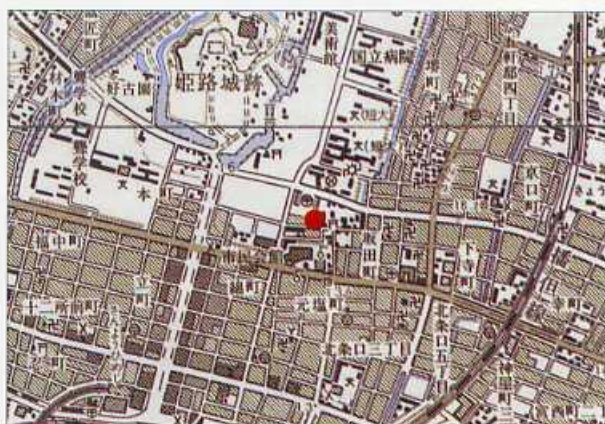
26. 本町遺跡・姫路城跡 (第201次)

店舗建て替え

- 1.所在地 姫路市総社本町192
- 2.調査面積 39㎡
- 3.調査期間 平成13年6月28日～平成13年6月29日
- 4.担当者 森

調査地は射楯兵主神社(播磨国総社)の西参道に面し、姫路城中曲輪南東部に位置するとともに、播磨国府跡と想定されている本町遺跡にも含まれる。

調査区内では大部分が江戸時代後期以後に掘削されたと考えられる大型の掘込みの中に入り、本町遺跡に関わる奈良～平安時代の遺構や中世以後の播磨国惣社関連の遺構は検出できなかった。こうした大型の掘込みは、近接する特別史跡姫路城跡D地区の調査でも確認しており、幕末から明治時代にかけての土地改変に伴う遺構の可能性もある。また、掘込みから外れた調査区西端部では現地表面から55～60cm下で黄褐色土地山を確認しており、周辺部の調査事例を考慮すると、江戸時代およびそれ以前の遺構面は比較的浅い位置に存在したものとみられる。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区南壁土層断面

27. 姫路城城下町跡

(第205次)

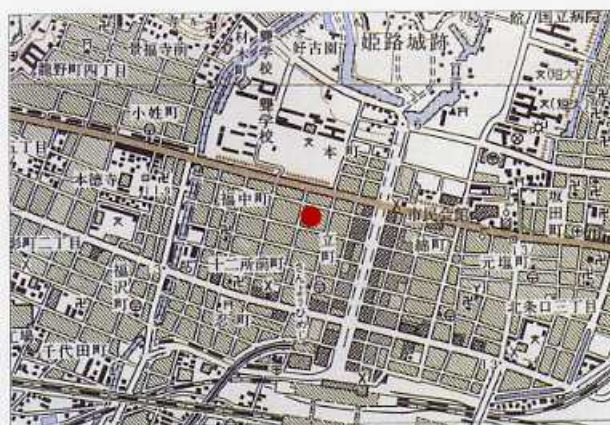
民間開発

- 1.所在地 姫路市本町168番地
- 2.調査面積 210㎡
- 3.調査期間 平成13年11月27日～平成13年12月27日
- 4.担当者 中川

調査地は姫路城外曲輪に位置し、山陽道に近接した町家の一面に該当する。

検出されたのは町家の区画遺構とそれに伴う井戸、埋甕、水琴窟等である。区画遺構は石組み溝と石組みのものがある。両者が対になって1軒分の敷地を区画しており、その間隔は7.4m(約4間1尺)を測る。『姫路市史』第3巻によれば、江戸時代後半の調査地周辺は平均で「間口」約4～5間、「裏行」約18間5尺の南北に長い長方形の町家によって構成されており、調査成果とほぼ合致する。調査地周辺の現況と比較すると一部改変を受けているものの江戸時代の町割りの名残を留めていることが判明した。

市街地の中においても遺跡は良好に残っていることが確認され、今後の調査の進展が期待される。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区全景(北から)

28. 姫路城城下町跡

(第200次)

城南線共同溝整備

- 1.所在地 姫路市坂田町・大黒壺丁町
- 2.調査面積 630㎡
- 3.調査期間 平成13年6月21日～平成13年10月18日
- 4.担当者 多田

城南線の電柱を地中化するための共同溝工事に先立ち、幅1.5mのトレンチを420m分設定した。

調査地は外堀と中堀間の中曲輪に位置し、「姫路侍屋敷図」などによると町屋、寺院、武家屋敷に該当する。

ガス管や下水の支管など、全体的に攪乱を受けており遺構の残りはよくなかった。基本的には舗装の下に戦災整地土を含む近現代の盛土があり、約15～50cmの江戸時代と推定される暗灰黄色層を経て褐色土の地山に至る。

遺構はピットや土坑、石組み溝などが検出された。溝の一つは、絵図による寺町と町家境界の推定と一致する。ピットや土坑も多くは江戸時代の遺物が出土しており、城下町に伴うものと推定される。ただ、一部は須恵器細片などを含み古代から中世にかけての遺跡も存在した可能性がある。



調査地の位置図(「姫路南部」)



4区礎石検出状況(南西から)

●こんなものでました●

土のなかから現れた天空の鯨

出土遺跡:特別史跡姫路城跡

天高く聳え建つ天守の頂上に据えられた鯨瓦。瓦のなかでもお城を象徴する存在です。そのなかには、今も櫓の上にいる現役のものから、役目を終えて地中に投棄されたものまで様々です。近年、姫路城内の防災工事に伴う発掘調査などで、鯨瓦の出土事例が増えつつあります。今回は、そのような資料について見てみましょう。

「お菊井戸」のある上山里曲輪では、瓦の廃棄土坑から鯨の胴と尾鰭の境目部分の破片が見つかります。背鰭と尾鰭との間には、「月日門義種造之」との銘文がヘラで刻まれていました。義種とは姫路御城瓦師の大古瀬市左衛門のことです。有本隆氏の研究によれば、義種は文化年間(1804~1818)頃に活躍していました。同じ土坑からは藩主酒井家の家紋入りの「文化十三年」銘の鬼板瓦も見つかっており、同じ頃に作られたものと推定されます。

当時、大天守の渡櫓の修理が行われていたので、その時に使用されたものの可能性があるでしょう。

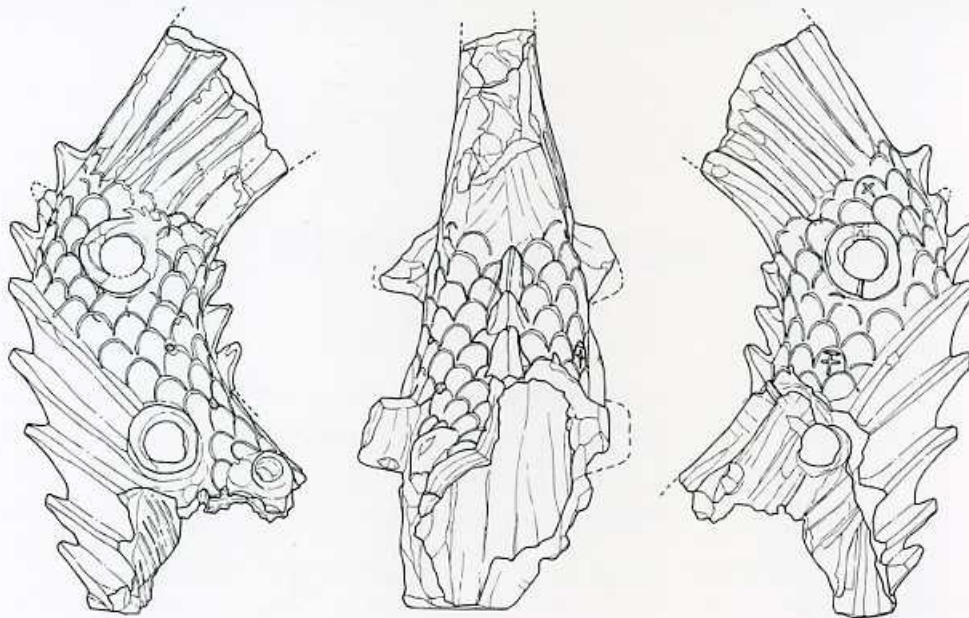
〔参考文献〕 有本 隆 『播磨の瓦刻銘史』1984



上山里曲輪出土鯨瓦



上山里曲輪出土鯨瓦銘文拓本



0 40cm

西の丸出土鯨瓦実測図



TSUBOHORI

平成13年度(2001)
姫路市埋蔵文化財調査略報

平成15年(2003年)3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課
兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷 松尾印刷株式会社
兵庫県姫路市南新在家9-7